四

磐音は由蔵を伴い、享楽庵の百姓家から母屋に戻った。

裏口から入ると蚊遣りの匂いと酒の香りが漂ってきた。

「槇原、始末はつけたか」

一徳寺大願の声が訊いてきた。

由蔵がつかつかと廊下を進むと、

「梅村様、ようまあ、今津屋の老分由蔵を虚仮にしてくれましたな」

と言いながら、座敷に顔を出した。

「あやつら、しくじりおったか」

大願が慌てたふうもなく言うと、手にしていた杯を膳に戻した。由蔵の後ろに従う磐音に視線をやりながら、傍らに置いた赤塗りの大刀を悠然と引き付ける。少しも慌て騒ぐところがない。

磐音も由蔵を庇うように座敷に入った。

「こやつのことをちと甘く見たか」

と苦笑いした後流が左手を袖に入れた。

右手の杯をおように差出し、おようが受け取った。

杯をぜんに戻すと、おようは何気ない素振りで二つ輪の髭に手をやった。

磐音はその様子を見て、

「老分どの、廊下に下がってくだされ」

と言いながら、左手を脇差しの鍔にかけた。

「梅村様、この世の中は、力ずくで押し渡れるものではありませんぞ。おませさんは貧乏御家人の倅ゆえ、金に不自由をなされた。それで金こそ力の源と勘違いされたようじゃが、人にも金にも情けをかけねば、我が身を助けてはくれぬのじゃ。この理屈、おまえさんには理解がつくまいな」

「番頭、おれには能書きなんぞ通じねえよ」

磐音が由蔵の肩を押した。

由蔵はよろよろと廊下によろけた。

磐音が包平の鞘の差裏から小柄を抜いて捻り上げたのと、おようの頭の手が簪を抜き取って手裏剣のように抛ったのが同時だった。

小柄と先が尖った簪が空を裂いた。

だが、座している者と立って構えている者との差が飛び道具の勢いになって現れた。

磐音の小柄がおようの胸に突き立ち、飛び道具に仕立てられた簪を磐音は横っ飛びに避けた。

「あうっ！」

呻き声が洩れ、おようの体が後ろ向きに倒れ込んだ。

「おのれ！」

梅村後流は叫ぶと片膝を立てて、袖の仲のてを閃かせた。懐に呑んでいた短刀を抜身にして、中腰で磐音に突っかけてきた。

御家人崩れの攻撃を引き寄せておいて、包平を抜き撃った。

迅速の剣が袈裟に決まり、後流はおようの傍らに崩れ落ちた。

磐音は、その間に十智流の達人、一徳寺大願が磐音から反対側の隣室に転がり込み、態勢を立て直したのを見た。

十智流は尾張藩士の松井市正宗卿が流祖の剣だ。

この松井、戦国の武将今川義元の臣松井五郎八の末裔で、実践剣法を基にいろいろな剣術の長所を取り入れ、工夫した。その後、江戸に出て、二天一流の古橋惣右衛門の門下に入ってさらに修業を積み、正徳四年に十智の伝を得た剣術だ。

一徳寺大願がどれほどの剣者か、磐音には未だ見当がつかなかった。

隣室の暗がりで夏羽織を脱ぎ捨てた大願が剣を抜いた気配のあと、のっそりと磐音の視界に戻ってきた。

「ちと遊惰な暮らしに慣れて、油断をいたしたようだ」

大願は動揺から立ち直ると、素早く剣客の相貌に戻っていた。先ほど、後流の用心棒として、だらしない姿を見せていたときから、態度は一変していた。

（これはなかなかの遣い手）

磐音は気を引き締めた。

「庭に出ようか」

大願はおようと後流が倒れ伏した光景にちらりと視線をやると、磐音に誘いをかけた。

「お望みとあれば」

磐音は由蔵を背後に回して、大願を先に庭に下ろそうとした。

大願は行灯の明かりを縁側まで運んできて、置いた。更に裸足の足裏を地面にこすり着けて、すべりを防いだ。

磐音はゆっくりと庭石から降りた。

「そのほう、流儀はなにか」

「国許で神伝流を学んだ後、神田三崎町の佐々木玲圓先生のもとで直心影流を修業いたした」

磐音の変じはあくまでゆったりとしていた。

「玲圓門下とは、なかなかの腕前とみた」

一徳寺大願の顔が引き締まった。赤塗りの剣を腰で一捻りした後、抜いた。

その切っ先を下段に取り、磐音は正眼に構えた。

縁側の明かりが二人の対決を照らしだした。

見物は息を呑む由蔵一人だ。

間合いは一間半。

大願のどっしりとした構えは小揺るぎもしない。

磐音も国許の神伝一刀流の師匠中戸信継が、

「居眠り剣法」

と称した待ちの構えを端然と続けた。

闇を支配するときが重く、濃密に流れていく。

由蔵はいつの間にか、荒い息をついていた。

竹藪を吹き抜けてきた風が行灯の明かりを揺らした。

大願の下段剣の剣がゆっくりと移動を始めた。自分の足前に置かれていた刃が左へと流れていく。

淀みなく動く刃は磐音を誘っていた。

が、移動する剣に隙は見つけられなかった。

切っ先が横手から上空へ大きな円を描くように上がっていく。

磐音は切っ先の動きよりも大願の瞳孔を注視していた。

刃がほぼ水平に、大願の真横に寝かされた。さらに上空へと切っ先が上昇を続けた。

磐音は正眼のか前を保持していた。

切っ先が乾の方角に、斜めに差し上げられた時、気配もなく大願は、突進してきた。

かざされた剣が間合いの打ちに踏み込むと同時に、右手一本の片手斬りに買えられた、磐音の右肩を襲ってきた。

片手斬りの分、大願の剣の伸びは予測を超えて速かった。

磐音は、襲来する剣を不動の姿勢で弾いた。

大願はそのことを読んでいた。

磐音の左側を擦り抜けながら、なんと左手で小刀を抜き放ち、磐音の腹部を搔き斬ろうとした。このことは大願二刀流の二天一流を修業したことを示していた。

磐音は剣士の本能で視線の外から襲い来る脇差しの攻撃を感じて、片手斬りを弾いた包平を下方に落としていた。

包平はかろうじて脇差しの襲来を弾き得た。

磐音は通りすぎる殺気に反転した。

そのとき、かねひらの切っ先は地に落ちていた。

大願の手には二剣があった。

その二つの剣を、鷹が両羽を広げたように横に突き出した。

「秘剣裏巻昇竜！」

一徳寺大願の口からその呟きが洩れた。

磐音は再び不動の姿勢に戻った。先ほどと違うことは正眼の剣が地に落ちていることだ。

大願の右手の大剣がふたたび右回りに円を描き始めた。緩やかに移動する切っ先は、対峙する者を眠りと幻影の世界に誘うようだ。

真横から移動を始めた剣は地に落ちて、再び上昇し、頭上に上がって、元の位置へと一回転した。さらに切っ先は水面に小石を投げ込んだときのように波紋を描き続ける。だが、今度の輪は前の輪よりも小さな渦を描いていた。

大願の大剣の渦巻きがどう変化するか、磐音は推測がつかなかった。

はっきり言えることは、左手に構えられた小刀が移動し続ける渦巻きの大刀を補完していることだ。大刀の動きに幻惑されて突っ込めば、小刀の餌食になるだろう。

渦巻きの輪が小さくなるにつれ、切っ先の動きが早くなった。

磐音はふと切っ先の動きに惑わされている自分を感じた。

瞼が重く、垂れてくる。

（眠ってはならぬ、磐音）

磐音は自分を叱咤した。

大願の切っ先は渦巻きの中心に寄っていこうとしていた。渦が小さくなった分、大願の剣は突き出されるように磐音に向かって水平に伸びていた。

磐音の意識は、渦潮に巻き込まれる小舟のように今まさに姿を没しようとしていた。

由蔵は息を呑んで戦いを見つめつつも、磐音が陥った術中を本能で理解した。

（なんぞ助けることはないか）

縁側に立つ由蔵の目に行灯の光が目についた。

（暗闇なれば術は利くまい）

由蔵は必死の思いでアンドンを蹴り飛ばした。

行灯は庭に転がり落ちて大きく燃え上がった。

その瞬間、術が破れ、大願の渦巻きが停止した。

磐音は正気に戻った。

渦巻きを描き終わろうとした大願の切っ先が予定を速めて、磐音の喉に伸びてきた。

それは渦の中から立ち上る竜頭のように出現した。同時に左手の小剣が親竜に連れ添う子竜のように、阿吽の呼吸で磐音の右首を襲ってきた。

磐音は二つの剣の切っ先の動きを瞬時に判断すると、渦巻きの目の中に猛然と我が身を飛び込ませていた。

その行動が大願の気合を殺ぎ、間合いを狂わせた。

大胆にも踏み込んだ磐音の地擦りの包平が、大願の見えぬ死角から下半身を斬撃していた。

磐音の掌に存分な手応えが伝わってきた。

「な、なんと！」

一徳寺大願の体が硬直して、渦巻きが、二匹の昇竜が磐音の視界から消えた。

ぐらり

大願の五体が揺らぎ、ずるずると地面に転がり崩れていった。

その瞬間、燃え上がっていた行灯の明かりが燃え尽きて、消えた。

闇の中から、磐音と由蔵の息が期せずして漏れ響いた。

台所に燈されていた常夜灯から行灯に火を移して、明かりが戻ってきた。

「なんとも冷や汗をかかされましたよ。まずは打ちの借金分を取り戻さなくては」

由蔵はさすがに長年両替商で鍛えられた商人、しっかりしていた。

母屋のあちこちを探すと、後流とおようの寝間の隠し戸棚から銭箱を見つけ出し、元金五百両と利息の三十二両をきっちりと取り出した。銭箱は元に戻し、五百三十二両を用意していた金袋に仕舞いこむと、

「あとはお上が始末なさればよいことで」

とようやく顔の緊張を解いた。

「宮松もまっておるで戻ろうか」

磐音がそういったとき、享楽庵に新たな足音が響いた。

磐音は再び緊張を呼び戻すと、包平の柄に手をかけた。

「老分さん！」

「坂崎様」

宮松の声が響いた。

「こっちだ」

と叫ぶと座敷に御用提灯が飛び込んできた。

磐音の見知った南町奉行所定廻りの木下一郎太と佐吉親分、それに手下たちだ。

今津屋では支配人と呼ばれる番頭の和七の姿が混じり、

「ああつ、ご無事でよかった！」

と叫んでいた。

「何事です、この騒ぎは」

由蔵が余裕を見せて言った。

「あまりにもお帰りが遅いので、相手が相手だけに旦那様が心配されて、南町奉行所の木下様にご相談なされたのです」

「それで木下様と佐吉親分がお出張りくださいましたか。ご苦労さまにございます」

由蔵が如才なく町方役人に頭を下げた。

「仙台坂野崎の地蔵堂を通りかかると宮松が飛び出してきて、老分さんが捕まったというものだから、肝を冷やして飛び込んできた次第です」

「それは相済まぬことでしたな。木下様、たった今、ひと騒ぎ済んだところですよ」

と享楽庵を訪ねてからの出来事を若い同心に説明した。

「佐吉、後流はなにかと訴えの多い人物だ。生き残った仲間はいないか、探してみよ」

「へえっ！」

佐吉たちがっ享楽庵のあちこちに散って、調べ始めた。

由蔵と言わねたちは、明け方ようやく両国西広小路の今津家に戻ってきた。

「おおっ、老分さんも坂崎様も無事でなんいよりでした」

徹夜で心配していた今津屋吉右衛門が由蔵らの顔を見て、ほっと安堵の言葉を漏らした。

「旦那様、なんとも心配をかけました」

由蔵が謝り、吉右衛門や奉行人たちに事情を説明した。

「えらい目にあわれましたな」

吉右衛門が労いの言葉をかけた。

その奉行人の中におこんも混じっていたが、

「老分さん、坂崎さん、宮松さん、お腹が空いたでしょう。まずは台所においでなさいな」

と誘ってくれた。

「おこんさん、朝餉を馳走になりたいところじゃが、宮戸川に参る刻限だ。またにしよう」

「えっ！これから鰻割きの仕事に行くの」

「さよう。それがしの大事な生計じゃからな」

そう断ったときには、今津屋を飛び出して、両国橋に向かって駆け出していた。

夕刻、湯から戻った磐音は、井戸端で米を研ごうとしていた。

青物の棒手振り、亀吉が、

「旦那、だれが飯を炊いてれる女はいないのかい」

と汗塗れの体を洗いながら言った。亀吉は江戸の町に野菜を売り歩いて戻ったばかりだ。

「残念ながら、長屋暮らしの浪人を面倒見用という酔狂な女性はおらぬな」

「そうでもねえぜ」

亀吉が木戸口を振り見た。

今津屋のおこんが立っていた。

「少しは寝たの」

「宮戸川から戻って昼寝をしました」

「旦那様がお礼に、これを届けてくれって」

「わざわざおこんさんが橋を渡ってこられるまでもない。ついでの折りでよいものを」

そういう磐音におこんがずしりと重い包みを渡した。

「これは過分です」

即座に磐音が言った。包みの中はどう見ても切り餅だ。

「二十五両ぽっち、今津屋にはなんでもないの。それに坂崎さんは命を張って、老分さんを助け出し、貸金に利息まで取り戻したのよ。取っておきなさい。

「よいかな」

「当然よ。南町の大頭与力様が言っていたわ。坂崎とおるとなんとなく金になるって」

「なにっ！此度も笹塚孫一さまが出張られたか」

「だって木下様の上司は笹塚様ですもの、黄金色の匂いを見落とすはずもないわ。享楽庵とかいう別邸を総調べして、かなりの金子を没収されたようよ。坂崎には礼を申してくれと老分さんに言付けていたもの」

「なんとのう、あのお方は、悪人の上前を撥ねる一番のワルじゃな」

そう嘆いた磐音に、

「それと手紙」

と言っておこんは書状を手渡した。

差し出人は豊後関前藩江戸屋敷の御直目付中居半蔵だ。

「お店から暇を貰ってきたの。どう、私に付き合って、何か美味しいものでも食べに行きましょうよ」

とおこんが誘った。

磐音は御飯の仕度をするのが面倒になっていた。

「かまわぬが、この手紙を読むあいだ待ってもらえませんか」

「なら、どてらの金兵衛さんの家で待っているわ」

と自分の父親をそう呼ぶと木戸口を出ていった。

「旦那、おこんちゃんはなかなかの女だが、尻に敷かれらあ。所帯を持つのはやめといたほうがいいね」

と亀吉が忠告してくれた。

磐音は黙って頷くと、釜と手紙と切り餅を抱えて長屋に戻った。裏の障子戸を開き、かすかに残った夕暮れの光で中居半蔵の手紙を呼んだ。

＜取り急ぎ認め候。それがし、江戸参府のために上府中の実高様にご面会をと、急遽江戸を離れる所存。もしそれがしの身に異変ありしとき、坂崎磐音自ら実高様に面会致し、関前藩の爲にししどはの専断横暴を訴えられんことを切望致し候＞

磐音は短い手紙に込められた中居半蔵の忠勤と覚悟を感じて、胸が熱くなった。